

深くないタイプなんだろうな、とふと思う。

緑と赤で飾り付けられたツリーの列を歩いて通り過ぎていく。しばらくぼんやり待ったり、読書をしたり、おみやげ屋を巡ったりしてから、東京に帰る飛行機へ飛び乗った。その十四時間後、世界でいちばん好きな場所に戻ってくる。すべてが可能であるように感じられる場所だ——クリスマスに、家族と物理的に近くにいられないという点は別として。でもまあ、求めるものすべてを手にてきてしまったら、人生はきつと退屈なんじゃないかな。

豆腐と涙とマリファナと

東京のよく晴れた朝。パジャマのまま猫を引き連れて、味噌汁をつくる。NHKラジオを付けてから、沸騰したお湯にワカメと昆布を入れる。キッチン窓に結露が出てきて、窓を開ける。外からかすかに聞こえてくる鳥のさえずりと、ラジオの音声心地よく混じり合う。

穏やかな喜びが湧き上がってくるが、NHKのアナウンサーが伝える内容が耳に入ると、突然そうした気持ち途絶えてしまう。東京の大学に通う青年が、アパート内で大麻を育てていたために逮捕されたというのだ。

僕はマリファナを吸わないけれど、とたんにその学生のこと気が毒になった。「かわいそうだよな」猫にそう話しかける。なんとなく、うちの猫にはいつも日本語で話すことにしていた。

味噌汁に入れる具材の調理をつづける。冷蔵庫から豆腐のパックを取り出し、水を切っ

て、まな板に載せる僕の手を、猫の目が追いかける。

NHKラジオのアナウンサーは、大学生の逮捕について議論をつづけていた。「大麻を栽培していた容疑者は二十歳でした」

数年にわたって、彼は刑務所に入れられるのかもしれない。

味噌汁に入れる豆腐を慎重に小さな立方体に刻みながら、この若者が生涯犯罪者と認識されてしまうというのが、一体どういうことか考えてしまう。両親にとっても、息子がこんな理由で刑務所に入るといえるのは悲劇だろう。

僕はふだんあまりセンチメンタルな人間ではないが、不思議と自分の内側で揺れ動くものがあった。一滴か二滴、涙が顔を伝って、あごからキッチンカウンターに零れ落ちる。玉ねぎを刻んでいて泣いてしまったことはあるけれど、豆腐を刻んで泣くなんてはじめてだ。

アメリカ人である僕にとって、マリファナは不名誉の印ではない。オバマ大統領もブッシュ大統領もクリントン大統領も、大麻を吸ったことがあると公に認めていた。マイクロソフト創業者のビル・ゲイツは、マリファナ使用の支持者だ。絶大な影響力をもつフランス知識人ミシェル・フーコーが、パリの自宅のバルコニーで大麻を栽培していたのも有名な話。ノーベル物理学賞を受賞したりチャード・ファイマンも、ノーベル文学賞を受賞

したボブ・ディランも、ハーブ吸引にまつわるチャールミングな物語を出版している。

政治や芸術や科学に大きな功績を残したこうした者たちと違って、大麻を栽培した日本の大学生は活躍の機会を奪われてしまう。そのことが大いなる不公正に思えて、潜在的な日本人の才能の大いなる損失に感じられて、胸を揺さぶられた。

ひとりの学生を刑務所に閉じ込めておく正当な理由がなにかしら考えられるだろうか。大麻使用による物理的な危険から身を守るため？ 刑務所が彼の健康を守ってくれて、彼にとってもいいことだということか？ 鍋のなかの味噌をかき混ぜながらあれこれ考えるうち、僕は医学的な研究結果を調べてみようかと決意する。

ポケットから携帯を取り出して、アメリカ政府の薬物乱用研究所のウェブサイト調べてみると、マリファナの摂取によって死んだ人間はいないと書かれている。同じウェブサイトには、「エキサイティングな研究」のおかげで、マリファナには良い側面があると判明したとさえ書かれている。

その研究が刺激的であるかは置いておいて、健康について信頼のおける専門家によって、物理的な危険がないと認識されているならば、なぜマリファナ使用者は日本でこんなに厳しい目に遭っているのだろうか。

ふたたびゆっくり味噌をかき回しながら考えているうちに、ひとつの疑問が浮かんでき

た。日本で現在のような、マリファナを敵視する法律ができたのはいつなんだろう。調べてみると、現在の大麻取締法は大戦後の一九四八年、アメリカ主導の連合国軍が日本を占領していた時期に制定されたものだとわかった。

日本人学生の逮捕へとつながった薬物政策の枠組みをつくったのはわが国であり、ダグラス・マッカーサー最高司令官の承認にもとづいていたのだ。

評価の高い『Asia Pacific Journal』誌に掲載されている、日本のマリファナの歴史についての論文を見つけて読んでみる。それによれば、アメリカが主導したマリファナ禁止は、健康のためというより、経済的な利益が動機だった可能性があるらしい。一九四〇年代半ばまでに、アメリカの医学研究者たちのあいだでマリファナの安全性についてはじゅうぶんな合意が形成されていた。一九四四年、ニューヨーク医学会は大規模な調査を踏まえて、マリファナには中毒性がなく、暴力性を誘発したり精神に害をもたらしたりもしないと発表している。

安全についてのリスクがないにもかかわらず、アメリカが日本でマリファナを禁止したのは、一部の研究者によれば、経済的動機にもとづいていた。僕が読んだ論文によると、ナイロンなど、新しいアメリカの石油化学製品が世界で利益を得ようとする際に、日本の大麻繊維が競合するとみなされたらしい。

こうしたあらゆる事情が意味するところを考えながら、僕は携帯電話を脇に置いて、味噌汁をお椀に注ぎ、卵を加えて、お米も少々すくって入れる。ねこまんまが大好きなのだ。軽く冷ましているあいだにふと、どうしてかつてはアメリカ中でもマリファナが違法だったのか知りたくなる。ふたたびiPhoneを手にして、わが国のマリファナの歴史を調べることにする。そのテーマについて書かれた記事が、NPR（アメリカのNHKみたいなもの）のウェブサイトですぐに見つかった。

驚いたことに、NPRによると、二十世紀半ばにアメリカのリーダーたちがマリファナを敵視したのは外国人嫌悪のためなのだ。一九二九年に大恐慌がはじまったのち、多くのアメリカ人は職を失い、そのことが一九三〇年代の反移民感情の爆発へとつながる。とりわけ大麻を吸っていたメキシコ人は安価な労働力だったために、職を失ったり正規雇用につけずにいたヨーロッパ系アメリカ人から嫌悪された。

一九三七年、アメリカの麻薬局長官ヘンリー・アンスリンガーは一通の手紙を携え、マリファナを吸引するメキシコ人とともに暮らすことの脅威について証言する。

一本の小さなマリファナ煙草が、わが国に暮らす墮落したスペイン語話者のうちにどんな影響をもたらすかをお示しできればと願っています。（中略）私たちの人口

のもっとも大きな割合を占めているのはスペイン語を話す人間たちであり、その多くが精神的に劣っているのです。

この報告で提出された事例証拠が、アメリカ連邦政府のマリファナに対する強硬姿勢を正当化することにつながったようだ——医学研究が反対の結果を示していたにもかかわらず。

もしこのマリファナについての歴史が一部でも正しいとしたら、あわれな東京の大学生の逮捕につながった法律は、日本社会の利益とはなんら関係なく、もはや時代遅れのアメリカの経済的・自民族中心的な関心から生まれていることになる。

味噌汁に視線を戻して、スプーンで豆腐をすくう。

いまの日本でマリファナを合法化したら、なにか不都合があるのだろうか？ ねこまんまをすすりながらも少し調査をつづけてみると、いくつかの問題が見えてくる。まず、日本の酒と煙草の文化がマリファナと競い合うようになることで、売り上げを落とすかもしれないという点。

日本政府はいまのところ、日本たばこ産業株式会社（JT）の三分の一の株式を所有している。つまり、もし別の植物を吸うことがかわりの娯楽として人気になったら、政府はその変化に経済的に適応しなければならない。それなのに、日本政府がこの煙草という、あきらかに健康に悪い植物に莫大な投資をおこなっていると知って、僕はもやもやした気持ちになる。

考えを巡らせながら、豆腐の立方体をまたひとつ口に入れて、これまでの調査結果が記録された携帯電話を手元に置く。深く息をつくとき、ふたたびキッチンの外から鳥たちの平和なさえずりが聞こえてくる。いつの日か、逮捕された少年がこの鳥たちと同じように自由になりますように。アメリカまで翼を飛ばたかせさえすれば、マリファナも吸えるし、吸っても大統領にだってなれるんだから！